



Subaru

男声合唱団

ニュース№404 '13. 3. 13

祭典・制作協力金

昴・3/12現在	456,000円です。
(前回)	+29,000)
(昴目標)	600,000円)

新譜「憧れ」、「安里屋ユンタ」他をレッスン

3. 1

□ 3月1日（金）は岡邑さんの体操と檀先生のヴォイストレーニングに始まり、本並先生の指揮、森さんのピアノで「憧れ」、「安里屋ユンタ」（以上新譜）と、「降りつむ」、「ああ夜よ」、「音戸の舟唄」、「母なるヴォルガを下りて」と「美しく碧きドナウ」と、沢山の曲をレッスンしました。参加は、全34名でした。

「国際婦人デー」に出演しました

3. 8

□ 3月8日（金）、「原発ゼロへ フクシマとつながり未来をつくる」と題して「2013年国際婦人デー大阪集会」が「エル大阪大ホール」で開かれ、オープニングコンサート「おおさかのうたごえ」のプログラムで昴は集会事務局からのご指名の曲「おらあここがいい」を東北の震災、原発の被災者との連帯をこめて満席の会場で元気に歌いあげました。本並先生の指揮、山下さんのピアノで参加者は全25名でした。



□ 同プログラムで、「2013日本のうたごえ・おおさか」の合同曲「君死にたまふことなかれ」を、山本恵造先生指揮、山下和子さんピアノ、昴の団員12名（兼団員を含む）を加えた80名のステージで歌いあげ、満場の感動を呼び起こしました。（下の写真はリハーサル風景）



□音楽センター発行の「うた・うた・うた」に「安里屋ユンタ」が載っており、歌詞の大意が記載されています(112ページ)。歌詞は8番まであり、ちょっとした物語になっているようです。昴が歌うのは下記の4つです。

<p>(サー) あさどやぬ くやまにヨ (サーユイユイ) (※1) あんちゅらさ まりぼしヨ (マタハリヌチンダラカヌシャマヨ) (※2)</p>	<p>安里屋(屋号)のクヤマという娘は <u>あのように美しく生まれ</u></p>
<p>(サー) みざししゅぬ くゆたらヨ あたりよやぬ ぬずみよたヨ</p>	<p>目差主(役人)から(妾にと)請われ あたりよ親(目差主の上役)から望まれ</p>
<p>(サー) みざししゅぬ ばな んーばヨ あたりよやや くりゃゆむヨ</p>	<p>目差主は 私(ば=我)いや あたりよ親は <u>これは嫌い(ゆむ=忌む)</u></p>
<p>(サー) なゆでから んーばですヨ いきやでから ゆむですヨ</p>	<p>なぜ いやという どうして 嫌いという</p>

ただし、歌詞の大意の欄の下線部および※1、※2、《参考》はインターネットから編集子が勝手に追加しました。

※1 「ユイユイ」は「結い結い」と思われる。「結い」は昔の農作業などの一般的なやり方で、田植えや刈り取りなど様々な作業を共同作業であることをいう。「ユンタ」は、労働歌や相聞歌(歌垣で男女たがいに掛け合いでうたう)としてうたわれた。「結い歌」が語源か(「詠み歌」という説もある)。

※2 仕事の関係でインドネシアに詳しい伊藤さん(副指揮者)からの説明で、インドネシア語で「マタハリヌチンダラカヌシャマヨ」は「太陽は我らを等しく愛する」という意味だそうです。歌垣は、沖縄を含む日本各地のほか、中国南部、インドネシア、フィリピンなどの共通の風習で、ハヤシ言葉も共通するのも知れません。そういえば、沖縄料理の「チャンプルー」の語源はインドネシア語・マレー語の「チャンプルー」(沖縄と同じ料理)といわれているそうです。

他の解釈をインターネットで探しましたら次の文がありました。「マタハリヌチンダラカヌシャマヨ」は八重山方言で、マタは感嘆語、ハリというのは瑠璃で、美しいガラスのこと。チンダラというのは可愛いという意味。カヌシャは美しいの意。マが女性。ヨは接尾語。「なんと、ガラスのように美しく可愛い女性であることだなあ」という意味になると。

《余談：求婚を拒絶した気丈な美女クヤマ》

資料提供：寺脇さん(T2)、若園さん(T1)

□「安里屋ユンタ」は、琉球王国時代の竹富島に実在した絶世の美女・安里屋クヤマ(1722-1799年)と、琉球王府より八重山に派遣されクヤマに一目惚れした目差主(みざししゅ。下級役人)のやり取りを面白おかしく描いている。

18世紀の八重山では庶民に苛酷な人頭税の取り立てが課せられており、庶民が役人に逆らうことは普通では考えられなかった。そんな中で目差主の求婚を撥ねつけるクヤマの気丈さ(役人に妾を差し出すと人頭税の免除など特典が与えられたにもかかわらず)は八重山の庶民の間で反骨精神の象徴として語り継がれ、結の田植歌と結び付いて19世紀初頭までに安里屋ユンタとなったと考えられている。歌詞は23番まで続き、4番以降ではクヤマに振られた目差主が「ならばお前より美しい娘を見つけて嫁にする」と言ってクヤマと別れ、イスクマという娘を娶って郷里に連れて帰る過程を描いているが、一般に歌われるのは6番までのことが多い。

□新「安里屋ユンタ」として一般に歌われているのは「サー君は野中のいばらの花よ・・・」で、八重山出身の音楽家宮良長包氏が編曲したものであるが、原詞とはまったく関係のない歌詞になっている。

《参考》「安里屋ユンタ—古謡はどのように伝承されているか(竹富島研究報告)」として、休職して沖縄に住み、琉球大学大学院でまとめた鳥塚義和さん(高校教諭・著書多数)の論文が「安里屋ユンタ」を現

地調査に基づき、社会的、歴史的、地誌的、多角的にとらえた力作で、時代背景もわかって、とても勉強になります。http://oecc.open.ed.jp/cdrom/reppdf/rep14.pdf

美しく碧きドナウの直訳

CDジャケットから: 若園さん提供

ドナウよ いとも青くいとも美しいお前は
 谷や牧場をつらぬいて安らかに波打ち流れる
 ぼくらのウイーンがお前に挨拶する
 お前の銀のリボンは国と国とを結び
 お前の美しい岸辺では
 嬉々としてころが高なるのだ
 遠くシュヴァルトベルトから流れ出て
 海に向かってお前は流れを早める
 すべてのものに祝福を送りながら
 お前は進路を東にとり
 多くの兄弟たちと合流する
 いつの世にも変わりなき団結の象徴よ
 古い山々はその高みから見下ろしつつ
 お前に遠くから親しげに挨拶し
 朝のきらめきに映える山々のいただけは
 お前の踊り立つ波に影を映している
 水底に住むニンフたちは
 お前の上に青空が広がって以来

お前の眺める一切のものを
 囁きながら告知らせる

 (中略)

 かくて固いきずなが僕らに巻き付くのだ
 歌と行為における自由と忠誠とが
 新たに満ち溢れる栄華を取り戻した
 ウイーンのまちの万歳をとえ
 人々のころを強く征服する
 そして最後に今一度挨拶を送ろう
 ぼくらの愛するドナウに あの壮麗な流れに
 ぼくらの挨拶を送ろう あのドナウに
 日々がぼくらにもたらすものがなんであろうとも
 忠誠と団結とが
 どんなときにもぼくらを護ってくださいように
 そう 忠誠と団結とが!

《概説》(若園さんの資料とインターネットから) 本作は非常に有名で人気が高く、作曲者の、またワルツの代名詞的な曲として広く親しまれている。タイトルは『美しき青きドナウ』(うつくしき-)とも訳される。

1866年のプロシアとの戦争で大敗し、失望の底に沈んだウィーン市民を慰めるために作曲された。当初はまったく別の歌詞を伴う男声合唱曲として書かれたが、もともとの詩の「くよくよするなよ!」「悲しいのかい?」などと言った歌詞が凶星を指したためか、反響は好ましいものではなかった。そのため、管弦楽用に書き直したところ、人気上昇した。1867年のパリ万博などで高い評価を受けたことから再評価され、歌詞も現在の物に改められた。毎年1月1日に行われる、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートの定番曲でもあり、「第二の国歌」「シュトラウスの最高傑作」としての名誉を博するようになった。

北部センター合唱団

25周年記念コンサート

- 2013年3月31日(日)
- 開場14:00 時開演14:30
- 茨木市民会館大ホール
- ・あなたとわたしと花たちと
 - ・四季のうたメドレー
 - ・みかんの花咲く丘
 - ・生きる
 - ・私の愛した街
 - ・初心のうた
 - ・行けわが思いよ黄金の翼にのって
 - ・「つぶてソング」より
- 参加費 1500円
(小・中・障害者 700円)
- 昴のレッスン日と重複していて、参加できませんが、応援はしてあげてください。

□ 3月30日(土) 13時~15時30分 ねむかホール

5の土

3月30日(土) 14時~17時
午後1時~3時30分 500円

会場 ねむかホール

連絡先 吉本昭子 090-2044-4096
岩本廣徳 090-1142-2615

西島さんの 切り撮ってみる

「Rabaul-①」(ラバウル-①)

Papua New Guinea (PNG と略記) は巨大なニューギニア島の東半分とその東にある多くの島々からなる日本の 1.25 倍ほどの陸地を持ち、人口は約 619 万人と日本の約 20 分の 1 の国です。先の大戦では「大東亜共栄圏」として占領した南東の先端部分でした。そのあたりでは 20 万人を超える日本兵が戦死しています。ラバウルはニューブリテン島の東北端にある町で山本五十六の作戦本部があったところです。今はタブルブル火山の噴火により相当部分が火山灰に覆われ、州都は新しく作られた町ココポに置かれています。

ここはカルデラが海となったブランチ湾のココポとラバウルの中間地点、海拔 30~40m の山中にある壕。奥にもう一隻。日本語案内書には「大発洞窟」とあり、大形発動機付きの船を隠す洞窟と云うことでしょう。

「ラバウルの五十六奇策避難壕」・・・船山に登りて動けぬままに



ここに着いた時は誰も居なかったけど、何処からともなく人々が集まり臨時の店が開かれました

